

社会学用語の権威研究：レリヴァンス問題という視座から

1 目的

武蔵大学 藤田哲司

現代日本の社会学用語には、自発的遵守と私的判断の放棄の対象となり、説明を要しない存在になっているものが少なくない。このような社会学用語の“権威”は、どのように成り立っているのだろうか。本報告では「レリヴァンス＝“関連づけの体系”」という社会学理論の発想を手がかりに「権威」「近代」「国家」という用語を取り上げ、用語の関連づけを変えることを提案し、当たり前（自明性）や「その前提」（来歴）を問うてみたい。

2 方法

用語定義の受け継がれ方から、その用語の権威性の高さについて判断する見方について提案する（どれぐらい私的判断放棄され、自明視されているか 『名著』→『事典』→『事典』）。そもそも権威には「開始機能」、「アーカイブ機能」、「正統化機能」という3つの働きがあるが、この報告では「開始機能」としての語の“原義”に話を限定し、用語の始原的意味（字義）の和漢と西洋の間における違いに焦点を当てる。方法的には社会学理論研究に学ぶ。「社会学の基礎概念（自己、他者、行為、関係、制度、逸脱、犯罪、宗教…）に対する自明性を問い直すことが現象学的社会学の喫緊の一課題であり、『問い』の方向である」（西原 [1998: 338]）。こうした現象学的社会学のまなざしを踏まえ、レリヴァンス(relevance)がレリーフ(relief)＝“浮き彫り”に由来した発想とされることから、レリヴァンス問題という視点から、「権威」、「近代」、「国家」の“原義”上の関連づけ（浮き立って連想される関連語）をめぐる論点にしぼり報告を行う予定である。

3 結論・提言

たとえば近代国家や社会運動論、家族社会学という用語を用いるとき、「近代」や「国家」、「運動」や「家族」という語の原義と来歴について、その使い手はどれくらい理解した上で用いているのだろうか。あるいは、対応する西洋語‘modern’；‘state’；‘movement’；‘family’の原義と来歴について、またなぜその定訳語に至ったかという歴史的過程について意識している日本人社会学研究者は、2013年現在どれくらいいるのか？もちろんこれだけに限らないが、日本社会学が「借り物感」を払拭できない理由の1つはここにある。あたかもイギリスに作ってもらった戦艦三笠でロシアに戦いを挑もうとした、明治期の日本海軍のようである。グローバル化について発言しグローバルに発信しようというのなら、自前で用語（発想）を編み出すことをめざすべきである。そのためにはまず、自国の社会学専門用語の“成り立ち”に対するよりひろくより深い関心と理解が、現代日本の社会学研究者1人ひとりに求められているのではないだろうか。自国の社会学用語に対する原義的・歴史的理解がないことには、他国の人々に日本社会を“日本社会学の用語”で説明し「深く」理解してもらうことはほとんど困難となるだろう。

本報告は、社会学用語の権威研究から「現実」のほうを変える可能性を模索している。2014年・世界社会学会議横浜大会の開催が迫りつつある“現在”、明治以来これまで自明視されつづけてきた、日本社会学の存立基盤の1つである社会学用語の権威の正統性について改めて問いたいのである。

主要な参考・引用文献

- 江原由美子 [1981] 「シュッツにおけるレリヴァンスの問題をめぐって」 『社会学評論』 32-3 日本社会学会。
藤田哲司 [2011] 『権威の社会現象学 人はなぜ権威を求めるのか』 東信堂 1・2章。
片桐雅隆 [1978] 「レリヴァンスと社会的世界」 『人文研究』 大阪市立大学文学部。
中村文哉 [1998] 「社会的行為とレリヴァンス—レリヴァンス概念の原像と射程」（西原和久 張江洋直 井出裕久 佐野雅彦 編 [1998] 『現象学的社会学は何を問うのか』 勁草書房所収）。
西原和久 [1998] 「あとがきにかえて」（西原和久 張江洋直 井出裕久 佐野雅彦 編 [1998] 『現象学的社会学は何を問うのか』 勁草書房所収）
下田直春 [1981] 「relevance」の訳語をめぐって」 『社会学的思考の基礎 増補改訂版』 新泉社。
Vaitkus, S. [1991] *How Is Society Possible? Intersubjectivity and the Fiduciary Attitude as Problem of the Social Group in Mead, Gurwitsch, and Schutz*, Kluwer Academic Publishers. =西原和久・工藤浩・菅原謙・矢田部圭介 訳 [1996] 『「間主観性」の社会学』 新泉社。
Schutz, A. [1970] *Reflections on the Problem of Relevance* (ed. by Zaner, R., M., Yale Univ. Press.) =那須壽・浜日出夫・今井千恵・入江正勝 訳 [1996] 『生活世界の構成』 マルジュ社。